

更に参ぜよ三〇年

第三、四回生 島崎 義孝

(臨濟宗多福院住職・藍野学院藍野大学短期大学部教授)

先ずはじめに、善光寺の留学僧育英会の多年にわたる育成事業に、改めて感謝と敬意を表しておきたい。

かれこれ四〇年も以前のことだが、私は修士論文で「アメリカの市民宗教」というテーマを選んだ。広大な土地には、多民族のネイティブ・アメリカン(欧米の歴史家からかつて「インディアン」と呼ばれた人たち)が永く居住してきた。それをコロンブスという探検家が「発見」し、比較的初期には主にヨーロッパ人が移民として入り込んだ。次いで世界各地、各国からたくさんの人たちが何世代にもわたり大挙して移り住み、やがて合衆国として成立することになった。多くの民族、人種、言語、宗教・文化から成る社会をひとつにまとめ上げ、WASPを中心に形成された「人工国家」つくりあげた。その精神的、政治的基盤になったのが市民宗教だったとおもう。ところが、どの社会でもいったん慣例や制度、法律などがつくられると、いつの間

にか不平不満や違和感をいだく人たちが出てくるのは自然の成り行きである。一九六〇年代を中心に生起したいわゆるカウンター・カルチャーは既成のワスプに対抗する社会文化事象であり、そうした一連の異議申し立ての現われだとおもう。その有力な対抗反応の一角にゼン仏教があった。

大学院を終えてから数年間、京都大徳寺の専門道場で雲水修行をしていたころだが、臨済宗のさる高名な老師の体験談を新聞紙上で読む機会があった。それはアメリカを中心とした北米各地のゼン・センターの様子を見聞してこられた、いまでいうフィールドワークの報告である。その記事の見出し語が「悩みのない日本人の修行」とか「あつちの禅がほんものじゃ」というもので、現役の雲水としてはおおいに触発された。すでに碧眼の雲水は京都あたりでも珍しくはなかったが、何が彼らを遠い、しかも生活文化もよほど異なる国である日本に誘うのか。日本人の若い人たちでもすぐには馴染難い禅堂生活に、何故引き寄せられるのか。個人的には強い関心をもたざるを得なかった。

そんな気持ちはずっとかかえていたが、きっかけというのはどこにあるのか分からない。いつもはあまり目にする事のない某新聞で、「横浜善光寺留学僧募集」という記事を見た。さっそく問い合わせをして概要を伺ったのだが、ともかく論文を提出するようにという指示だった

と思う。横浜に出向いた時には、武志和尚はあいにくご不在だったのでお目にかかれなかったが、電話をつないでくださった。アポなしで伺ったのに違いはない。その辺りの前後関係は記憶していないが、何やら小文を認めて無事に採用していただいた。

その頃まだ住職する寺も、大学の専任教員の就職口もなく、まったく躊躇せずに渡米できたのは幸いだったといえよう。最初は前角老師のL A ゼンセンターに落ち着き、そこからN Y のいくつかのセンターでご厄介になり、文献や伝聞でしか知らなかったアメリカのゼン仏教やその周辺の実態をつぶさに体験することができた。それまでの疑問が解消した面と、彼我の禅／ゼン仏教への受取方や取り組み方の違いに気付かされたのは大きな収穫だったと思う。観察した様子や所感を適宜、事務局に書き送り、いくつかの雑誌や新聞に掲載して頂いた。この留學僧派遣制度は一年間のプログラムだが、それではとても短いという気持ちが強くはたらくようになり、怖るおそる延長をお願いした。ところがそれは杞憂にすぎず、太っ腹な武志理事長は「宜しい」と快諾してくださったのである。

二年目の方が面白かったことはいうまでもない。夏のマンテン・センター（陽光寺）での安居期間中に南北アメリカはもちろん、ヨーロッパ各国からの大勢の参加者たちと仲よくなれたし、それぞれの地域のグループの様子を窺い知ることができたのも良い刺激になった。安居後

には前角老師の強い徳漣もあつて、ヨーロッパに拠点をもつグループの一行に従つて、最初はロンドン北方に位置するプレストンでの摂心にも加えてもらった。それを皮切りにオランダのアムステルダム、ドイツ、ポーランド、フランス、ベルギーを経巡り、方々で夏安吾中に知り合ったグループの人たちとも再会する機会も得た。十二月には再びアメリカの土を踏むことになつたわけだが、その間およそ三カ月、貧窮雲水にどうしてそれが出来たのかいまだによく分らない。皆さんのお慈悲のたまものだと思う。他には替え難い経験を積むことができた。それが現在に至るご縁の始まりである。

残念なことに、お世話をして頂いたその両先達は共々すでに遷化されてしまった。お二人の熱い宗盟心を肝に銘じて、今度は次の世代に確実に継承していく責務をわれわれ元留学僧はもっていると思う。この育英会が今後も継続するばかりか、さらに発展されるように衷心より祈念したい。

